HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 重症心身障がい児(者) の家族のエンパワメント : 父母が持つ強みの差異に着目して |
| Author(s) | コリー, 紀代 |
| Relation | 日本看護研究学会第22回北海道地方会学術集会. 2012 |
| Issue Date | 2012 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/53372 |
| Type | conference paper |
| File Information | nihonkango-22-hokkaido18.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 重症心身障がい児(者)の家族のエンパワメント
## －父母が持つ強みの差異に着目して－

○ コリー 紀代
北海道大学大学院教育学院博士後期課程

【目的】重症心身障がい児(者)の育児における両親がもつ強みの実態を調査し、家族をエンパワーするために求められる支援の方向性を探ることを目的とする。

【研究方法】無記名自記式質問紙法による横断的研究。調査期間は2010年5月～8月。医療的ケア必要児の中でも特に数多くの医療的ケアを要求される在宅人工呼吸器装着児（者）の家族を対象とし、全国展開している医療的ケア必要児（者）の親の会のうち、研究協力の了承が得られた2か所のどちらかに加入している会員393名全員を対象とした。質問紙の配布は、各親の会の事務局から指定された部数を送付し、事務局の協力を得て会員宅へ郵送した。質問紙には返信用封筒を同封し、各自で記入後、直接研究者あてに返送してもらった。質問紙の返送をもって研究協力への同意とみなした。質問内容の表現は、親の会のメンバーのチェックを受け、最終的に決定した。調査に先立って、所属大学の倫理委員会の承認を得た。

【結果】合計配布数393部（世帯）のうち、112部回収した（回収率28.2%）。有効回答数は母親が111部(100%)、父親が53部(47.7%)であった。親の年齢は27~72歳(平均46.6歳、SD＝10.34)、母親の年齢は25~73歳(平均44.2歳、SD＝8.79)、障がい児(者)の年齢は1～45歳（平均13.5歳、SD＝9.43）であった。子どもの人工呼吸器装着年数は5か月～27年（平均7.5年、SD＝5.98）であった。共働き世帯は10例（9.0%）であった。

育児不安に関して、母親の44%が「いつもある」と回答し、「時々ある」が35%、「ほとんどない」が15%、4%が「全くない」と回答し、父親の回答(順に、46%、36%、18%、0%)とかなり高い相関関係がみられた（スピアマンの順位相関係数：r＝0.99)。頼める人の存在については、母親の74.8%が「いる」、25.2%が「いない」と回答した一方、父親の77.4%が「いる」、22.6%が「いない」と回答した。情報入手経路(複数回答)は、母親・父親共に「病院受診時」が最も多く(75例、26例)、母親が「親の会」64例、「友人・知人」46例に対し、父親は「インターネット」20例、「親の会」18例の順であったが、r＝0.81と高い相関が認められた。他の人工呼吸器装着児の親との付き合いの程度に関しては、母親が「相談にのってもらう」51.4%、「面識がある程度」28.7%、「子どもを預かってもらうこともある」1.9%、「その他」17.8%であり、父親の回答は順に47.5%、47.5%、0%、5%、母親の回答との相関はr=0.86と高い相関があった。

【考察】母親と父親は、育児不安の感じ方、情報入手経路、頼める人の存在の有無、他の親との付き合いの程度に関して近似した回答をしていた。これは、母親と父親は相互関係を継続していくうちに、同じような強みを持つため、あるいは、母親が不安を感じるときには父親も同時に不安を持っているというように不安の強弱が父母の間で同調している可能性が考えられる。このため、子育て支援関連の論文で、家族支援（＝母親支援）のために、父親の育児参加の重要性が叫ばれているが、父親が身近なリソースとはなりにくいと考えられた。

【結論】父親と母親の強みが似た傾向を持つことが示され、不安の強弱が父母の間で同調している可能性が考えられた。加えて、母親への支援として、父親を一方的に身近な資源と捉えない態度や、父親支援を通じた母親支援等が、全体としての家族支援につながると考えられた。